

する。しかしながら『華嚴經』のサンスクリット版を比較すると、その総数が一三三と異なっている。さらには諸漢訳を比較すると、佛駄跋陀羅譯 (No. 278) の「阿僧祇品」の一二八、実叉難陀譯 (No. 279) の「阿僧祇品」の一三〇、「入法界品」の般若訳 (No. 293) の一五〇となる。このことは、『華嚴經』の諸版においてこれらの桁数の伝承が異なっていた可能性がある。もちろん、この数はその数字がもつ意味合いに従って次第に多くなり、最終的に一三六という数になった可能性もある。

『華嚴經』のこれらの桁数については、『翻訳名義大集』においてサンスクリットのチベット語訳の語彙資料として引用されている。この「阿僧祇品」(Nos. 7697-7820)と「入法界品」(Nos. 7821-7953)のそれぞれの桁数が列挙されているのだが、その両者の間で総数だけでなく、一部のサンスクリットならびにチベット語訳に相違がある。さらには、前述の『華嚴經』のチベット語訳と異なるばかりでなく、「入法界品」のサンスクリットとの相違も多く存在する。このことは、『翻訳名義大集』が依拠した『華嚴經』のチベット語訳およびサンスクリットは、『チベット大藏經』の「カンギル」所収の『華嚴經』のチベット語訳および現在伝わっているサンスクリット原典とは異なる版であった可能性がある。もちろん「カンギル」のものが『經集解説』のものに基づいて修正された可能性もある。

最後に、この一三六項目の桁数の宗教的意味を考えてみる。転数は十進法で繰り上がるのだが、各数については明らかではない。『華嚴經』の記述では、「拘梨に拘梨で一不変になる」とある。これを乘法と考えると、千万に千万を掛けると解釈する

と、第九番目の桁が十の十四乗になってしまい、最後の「不可説の不可説」は、まさに零を列挙することも不可能なほどの数になってしまう。もちろん『リタヴィスタラ』(Hokazono ed., pp. 578-579)の記述のように、各数を百進法と解釈することも可能であるが、それでも最後の桁数は十の二五八乗となるが、これだと「説くことが可能な数」である。いずれの場合にせよ、当時のインドにおいて実用的な意味を持つ数字ではなく、実際に用いられることのない数字であったと思われる。しかしながらこの表示不可能なほどの大きな数字は『華嚴經』の世界観を表す上で重要な意味をもつものとしてここに列挙されたのであろう。

梵文「法華經」における空の用例

西 康 友

初期大乘仏教の代表的な經典の一つである梵文「法華經」(以下、SP)に現れる空の用例について論じる。法華經の成立は、研究者たちによって説がさまざまに異なるが、現在のSPのような形になったのは、およそ西暦一五〇年ころといわれているのが一般的である。

本稿では、SPに現れる空の用例のすべてを明らかにし、SPの成立過程について一つの手がかりを見出すことを目的とする (SPは H. Kern, B. Nanjio (ed.), *Saddharmapundarika*,

第5部会

Bibliotheca Buddhica No. 10, St.-Petersbourg, 1908-12 (Kn)を用いる。)

SPに見られる「空」の用語、すなわち *śūnya-* (空) / *śūnyatā-* (空たること) / 空性) についての箇所 (Y. Ejima (ed.), *Index to the Saddharmapundarikāstra: Sanskrit, Tibetan, Chinese*, Tokyo, the Reiyukai, 1992, pp. 958-986 を参考にした) に着目すると、以下の三つに分類できることがわかる。それは、(一)空だけを用いている用例 (十四箇所)、(二)空を用い、前後にその内容を説明している用例 (四箇所)、(三)空を用いず、譬喩などによって空の内容を説明している用例 (四箇所) である。

(一)では、ただ「空」(*śūnya-*)、または「空性」(*śūnyatā-*) という用語を用いるだけで、その意味するところを説明せずに、「空を感じて」(Kn 62.15-16)、「空の教えを身につけ」(Kn 186.8-10) など、「空」の教えを實踐することが随処に強調され、素材に空の用語だけを用いていることがわかる。

(二)では、「空」の用語が、その前後に、「ちまもまに異なることなく」(Kn 143.1-2)、「生じない」「変化せず」「ありのままの状態」(Kn 277.11-278.3) などの同格の用語とともに用いられ、空の内容を説明しており、かなり論理的な表現となっている。このような用例は、第十三章 *Sukhavihāra* (Kn 281.9-10) の前半までに現れている。

(三)では、直接「空」という用語 (*śūnya-*, *śūnyatā-*) を用いず、「滅する」と「生じる」ことから離れてくる」(*nirodha-utpāda-vivarjitas*) (Kn 117.3-4) と表現されており、譬喩的

に空の内容を説明している。

以上のことから、(一)では、原始仏教における空に近いと思われる、SPでは空の用語が、第三章 *Aupama* (Kn 62.15-16) になって初めて用いられている。このことから、原始仏教における空の影響を受けているのは、第二章 *Upāyakaśālyā* (鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』では、「妙法蓮華経方便品第二」) ～第五章 *Osādhī* (「妙法蓮華経薬草論品第五」) の前半までであり、SPの最初期の成立であると思われる。また、(二)では、般若経群の中でも初期の成立といわれている *Aspaśāhasrikā-prajñāpāramitā* のように、論理的に空を説明することに近いと考えられ、SPでは第五章 *Osādhī* (Kn 137.10-11) 第八十一偈以降に、空の内容が論理的に表現されている。よって、般若経群の空の影響を受けているのは、第五章 *Osādhī* の後半～第十三章 *Sukhavihāra* (「妙法蓮華経安樂行品第十四」) の前半までであり、SPの最初期の成立のあとの成立であると思われる。さらに(三)では、SPには第一章 *Nidāna*、第四章 *Adhimukt*、第十三章 *Sukhavihāra* において現れるのである。空の思想は、原始仏教以来、もともと知られている思想の一つであった。しかし、原始仏教においても、梵文「法華経」においても中心的な思想ではない。初期大乘経典が多く存在するそのなかで、空の思想を重要視して説くのは、般若経群、および『大智度論』『中論』であるが、以上のような考察により、SPの成立過程やSPにある思想の解明の手がかりの一つとなりえよう。